

## 後期：現代キリスト教思想研究2——現代あるいはポストモダン

オリエンテーション+研究発表

1. 解釈学的神学と現代思想
2. 政治神学1——シュミットとモルトマン
3. 解放の神学1——フェミニスト神学1
4. 解放の神学2——フェミニスト神学2
5. 政治神学2——アガンベン
6. 政治神学3——ジジェク
7. 研究発表
8. 研究発表
9. 研究発表
10. 解放の神学3——黒人神学
11. 解放の神学4——アジア
12. 宗教の神学とヒック
13. エコロジーの神学 1/16：レポート提出（締めきり）

&lt;前回&gt;

**1 1. 解放の神学4——アジア****(1) アジアの神学**

・欧米神学の受容・紹介。近代化の文脈における土着化と解放というテーマ。

**(2) 民衆の神学**

李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編

『民衆の神学』教文館、1984年。

**(3) 発端あるいは文脈**

「民衆の神学は、一九七〇年代の韓国の民衆の自由を求める闘いの中で形を形成してきたことは事実である」、「韓国教会の一〇〇年に及ぶ歴史を読めば読む程に、信仰理解は伝統的に保守的でありながら、宣教の当初から日帝の植民地支配の抑圧からの解放の希求と闘いの歴史的な文脈の中で福音のメッセージを聞いてきたことがわかる。」（李仁夏、2）

**(4) 韓国民衆史の中で**

・「韓国における民衆と神学——アジア神学協議会についての伝記的報告」（徐洸善）

「今日の韓国人が、自らの主体性をはっきりさせるとき、東学運動—独立運動—三・一運動—四・一九革命という系譜を自分たちの民衆運動の系譜として述べることに、「彼が試みているのは、まず最初にその文学、感情、演劇等に現われている民衆の社会的伝記を読み、そこから民衆の歴史の動態を描き出すことである。」

「徐が観察しているように、「儒教の厳しい女性差別強要のもとでは、女性の存在は恨そのものである」、「恨は韓国女性の伝記や物語、小説、詩、劇等に避けがたく現われてくる、心理・社会的用語である」、「民衆の外国勢力によって束縛されてきたことを自覚しながら、しかも民族独立の感情を押さえなければならない時に、恨の感情は心理的・政治的怒り、挫折感、憤りの次元へと高まっていく。恨は個人的心理の次元と共に社会的・政治的次元における自覚である。」

・「韓国仮面劇に対する神学的一考察」（玄永學）

「仮面劇を通して庶民である民衆は、この世に対する批判的超越を経験し、また表現する。そしてこの世の不条理を笑いとばすのである」、「民衆は、支配者も指導者もこの世に対する妄想のためや、この世から切り離されているために見出すことができない世界の現実を正しく把握するばかりでなく、この世に対置し、またこの世を超越した、支配者と指導者が発見することが不可能な、もうひとつの現実を心に描くのである」、「民衆は意識化

され、批判的超越の姿勢をもつようになるのである。換言すると、批判的超越の姿勢は、民衆の日常生活における抑圧された感情の集積の結果生まれるのである。そして、そのうっ積した恨」「は解き放されるのである」

#### (5) 聖書の文脈で

・「マルコ福音書におけるイエスと民衆」(安炳茂)

「イエスはどのような人々に対して語ったのか、また、彼が語った内容の性格は何であったのか。のように問うことは、イエスのことばの歴史的特質を明らかにするであろう。イエスが語りかけた人々の社会的性格を明らかにするためには、その民衆の経済的・政治的・文化的な構成を探らなければならない。この主題をより包括的に把握するためには、イエスをとりまいていた民衆の社会構造全体と立場を知ることが必要である」、「マルコ福音書は、最初からイエスをとりまく群衆について語っている」、「これらの民衆は、いわゆる罪人であり、その社会では断罪されていたのである」、「いくつかの場面では、これらの民衆(オクロス)は、弟子たちと区別される」、「「オクロス」に対するイエスの姿勢は一貫している。彼は無条件に彼らを受け入れ、支持している。彼はありのままの彼らを受け入れている。彼はまた彼らに将来(神の国)を約束している」、「イエスが「オクロス」をひとつの勢力に組織化しようとしたという印象はない」「イエスと「ミンジュン」との関係は成立したり破れたりした。彼らは無条件にイエスにつき従った。彼らはイエスを歓迎した。そしてまた彼らはイエスを裏切りもしたのである」、「イエスは「ミンジュン」に神の国の到来を告知したのである」。

#### (6) 二つの物語の合流

・「二つの物語の合流」(徐南同)

「キリスト教の民衆伝統と韓国の民衆伝統との合流」、「韓国の民衆神学の課題は、基督教の民衆伝統と韓国の民衆伝統が、現在韓国教会の<神の宣教>活動において合流していることを証言することである。現在目の前に展開している事実と出来事を、<神の歴史介入>、聖霊の歴史、出エジプトの出来事とであると知ってそれに参与し、それを神学的に解釈する仕事である」

#### (7) 民衆の神学と日韓の交流

日本の聖書学研究の分野では、民衆の神学との交流。木田献一、荒井献、大貫隆

## 1 2. 宗教の神学とヒック

### (1) 宗教の神学

1. 宗教的多元性(複数性)と宗教多元主義:古い問題と新しい問題
2. 近代的問題状況:人間の営みとしての宗教とその多様性、その中におけるキリスト教
3. 宗教的多元性と教派的多元性→エキュメニズム
4. 現実:対立・相克(戦争)、民族・経済・政治の状況下での宗教
5. 多様性を整理しキリスト教をそこに位置づける議論
  - ・啓示論、救済論、歴史神学→土着化論
  - ・宗教類型論から価値判断へ:排他主義、包括主義、多元主義
6. 諸テーマ(問題群):戦争と平和(戦争論・平和論)、宗教間対話(対話論)、寛容(宗教的寛容論・信教の自由・政教分離)

### (2) ヒックと英語圏の宗教哲学

・*Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963(1990).

Introduction What Is the philosophy of Religion?

Chapter 1 The Judaic-Christian Concept of God

Chapter 2 Arguments for the Existence of God

- Chapter 3 Arguments Against the Existence of God
- Chapter 4 The Problem of Evil
- Chapter 5 Revelation and Faith
- Chapter 6 Evidentialism, Foundationalism, and Rational Belief
- Chapter 7 Problems of Religious Language
- Chapter 8 The Problem of Verification
- Chapter 9 The Conflicting Truth Claims of Different Religions
- Chapter 10 Human Destiny: Immortality and Resurrection
- Chapter 11 Human Destiny: Karma and Reincarnation
- For Further Reading

• *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.

#### 1 Introduction

- 1 A Religious interpretation of religion
- 2 Religion as a family-resemblance concept
- 3 Belief in the transcendent
- 4 Problems of terminology
- 5 Outline of the argument

#### Part One Phenomenological

- 2 The Soteriological Character of Post-Axial Religion
- 3 Salvation/Liberation as Human Transformation
- 4 The Cosmic Optimism of Post-Axial Religion

#### Part Two The Religious Ambiguity of the Universe

- 5 Ontological, Cosmological and Design Arguments
- 6 Morality, Religious Experience and Overall Probability
- 7 The Naturalistic Option

#### Part Three Epistemological

- 8 Natural Meaning and Experience
- 9 Ethical and Aesthetic Meaning and Experience
- 10 Religious Meaning and Experience
- 11 Religion and Reality
- 12 Contemporary Non-Realist Religion
- 13 The Rationality of Religious Belief

#### Part Four Religious Pluralism

- 14 The Pluralistic Hypothesis
- 15 The *Personae* of the Real
- 16 The *Impersonae* of the Real

#### Part Five Criteriological

- 17 Soteriology and Ethics
- 18 The Ethical Criterion

19 Myth, Mystery and the Unanswered Questions

20 The Problem of Conflicting Truth-Claims

Epilogue: The Future

・ *Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion*, Macmillan, 1993.

## (2) ヒック宗教哲学の基本構想

### A. 宗教概念

宗教史・宗教現象→基軸時代・救済宗教：自己中心から実在中心への転換

ポスト・モダン（本質主義以降）の概念規定→ヴィトゲンシュタイン・家族的類似性

### B. 宗教批判：近代以降の思想状況における宗教論

自然主義への論駁、宗教経験の擁護→合理性概念の再検討、終末論、

宇宙的楽観主義、還元主義批判

神の存在論証と悪論・神義論

宗教言語論→宗教的実在論

### C. 宗教的多元性：宗教的状況の現代

多元性と実在→ the Real

キリスト教の再解釈→排他主義、包括主義批判

以上の三つの問題領域は相互に結びついて宗教哲学の基礎問題を構成する。

## (3) 宗教言語と宗教的実在論

ここでは、Bについてヒックの議論をまとめてみよう。

### 1. 『人はいかにして神に出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館

#### ・ The principle of critical trust

「首尾一貫しないこの認識論の現況は、イギリス経験論が発展していく伝統のなかでしだいに明らかにされてきた。この伝統に属する思想家たちの独創性と才能を十分に論じることができないとしても、まずはそれを簡潔に要約すべきであろう。」(102-103)

John Locke (1632-1704) (127)、George Berkeley (1685-1753)、David Hume (1711-76)

G.E. Moore (1873-1958) : ムーアは「二十世紀前半のもっとも重要な哲学者の一人であるが、この点でヒュームを支持し、私たちは証明できない多くのことを知っている」と主張した。」(106)

There exists at present a living human body, which is *my* body.

The earth has existed also for many years before my body was born.

「実のところ、真理を直視するという意味での「知る」という言葉の理念的（つまりプラトンの）な意味において、あるいは論理的に誤りを犯しえないような心の状態にあるとき、私たちはただ現在あるままの意識内容と、そして「分析的真理、つまりトートロジーの真理を知るだけである。」(106)

「ロックとバークレーに準拠し、そのため二十世紀のコモン・センス学派ないし日常言語学派の哲学者たちに支持されるヒュームは、私たちがつねに拠りどころとして生きている暗黙的な原理の定式化を可能にしてくれる。これは、とくに疑う理由のないかぎり、そこにあるように見えるものはそこに存在するものとして受け入れる、ということを指している」、「通常、私たちは自らの経験を信頼している。また、もし信頼しなければ、一日たりとも、いや一時間たりとも生きていくことはできないだろう。しかし、これは盲目的

な信頼ではなく、いつでも修正できる批判的な信頼である。もしも急に目が覚め、それが書斎にいてパソコンで仕事をしている夢であったとわかったならば、そのときにはよく思い返してみても、夢で見た経験は思い違いであった——夢は思い違いをさせるものだという特別な意味のもので——と考えなおすだろう。」(107-108)

「私たちが生きていくうえで拠りどころとしている暗黙の原理は、批判的信頼ということになる。」(108)

「では、どうしてこの「批判的信頼」のを原理を、宗教体験も含めて、明かな認知体験一般に当てはめてはいけないのだろうか。」(109)

#### ・ Experiencing as interpreting / critical realism

「世界についての意識的経験と意識される世界とのあいだの関係に関して、三つの主要な立場」の区別。

「一つは素朴实在論」「私たちの身に周りの世界はそのあるがままの姿であるように思えるとする、日常的な自然な想定」、「すべての実際的な目的のためにはこれで何の支障もない。というのも、進化するにつれ、私たち人間の感覚は」「絶えず調節されてきたからである。」(119)

「素朴实在論に真っ向から対立するのが「観念論」である。これは、知覚された世界は私たちの意識のなかにあるだけである——より正確には私の意識のなかだけにだけある——、なぜなら私が交互作用する他者は、私の知覚世界の一部であるからだ、と主張する立場である。」(120)

「三つ目の、中間に立つ立場は、批判的实在論である。その基本原理は近代哲学に最大の影響を及ぼしたイマニエル・カント」「にまでさかのぼる。カント以前にも類似の考えは多くあったが、その内容を体系的な方法で明らかにしたのはカントであった」、「つてつもなく複雑」「ところどころ多様な解釈を迎え入れている」、「しかしカントは、私たちを超える实在、私たちから独立して存在する实在というもの容認した。けれども、实在はそれ自体では意識されず、観察もされないと論じた。それは、ただ人間精神の生得的構造としてのみ、その实在からのインパクト（衝撃）を、現象界のかたちをとって、意識にもたらすことができる。そこで私たちは各自の認知的感覚によって、また意識の諸形式と諸カテゴリーによって、私たちに現れるままのものとして世界を意識するのである。」(121)

「『批判的实在論』というのは、二十世紀のアメリカの哲学者によって生みだされた言葉であるが、これは世界が存在すると気づくことに心が創造的に寄与することを認める一方、その世界が私たちからは独立して存在するという实在論的な主張を表明する。その主張は十分に確証され、認知心理学や知識社会学において長く認められてきた。」(122)

「経験するとは解釈することであるというとき、私は「解釈する」という言葉を、聖書解釈でいうテキストの解釈」「の意味で使うのではなく、環境が私たちの感覚にもたらすインパクト（衝撃）をつねに私たちは解釈しているという意味で使う。また「意味」という言葉を「私たちが目的にかなった行動や対応ができるように仕向ける事態の特質という意味で使う」、「ウィトゲンシュタイン」の「何かを何かとして見る」と呼んだものによって」(122)、「私たちは「それを解釈しながら見ている」のである」、「何かを何かとして見る」は、私たちが日常生活のなかでいつもするように、すべての感覚を一つに合わせて使うときの「何かを何かとして経験する」にまで、ただちに拡張することができる。」(123)

2. *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.

11 Religion and Reality (pp.172-189)

religious realism

Religious experience, then, is structured by religious beliefs, and religious beliefs are implicit within religious experience.

And by analogy religious realism is the view that the objects of religious belief exist independently of what we take to be our human experience of them. For each religious tradition refers to something ... that stands transcendingly above or undergirdingly beneath and giving meaning or value to our existence. (172)

Religious realism is not of course to be equated with a straightforwardly literal understanding of religious discourse.

We can therefore only experience the Real as its presence affects our distinctively human modes of consciousness, varying as these do in their apperceptive resources and habits from culture to culture and from individual to individual. (173)

↓

言語の指示機能として、宗教的実在論を論じるという構想。

3. 宗教経験への信頼は批判的実在論として擁護できる (B)。

宗教経験について理論的な議論は無意味ではない。

+

宗教史と現代の宗教的状況の事実としての宗教の複数性の問題 (C)。

↓

この二つを理解可能にする宗教概念とはいかなるものか (宗教とは何か=A)。

4. こうした三つの問いを宗教哲学的に明確に論じた上で、キリスト教思想の内容の議論を展開する。

#### <参考文献>

##### 1. 宗教の神学

- ・ 古屋安雄『宗教の神学——その形成と課題』ヨルダン社、1985年。
- ・ ヒック、ニッター編『キリスト教の絶対性を超えて——宗教的多元主義の神学』春秋社。
- ・ G・デコスタ『キリスト教は宗教をどう考えるか——ポスト多元主義の宗教と神学』教文館。

##### 2. John Hick

- ・ *Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963 (1990). (『宗教の哲学』勁草書房。)
- ・ *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.
- ・ *Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion*, Macmillan, 1993.
- ・ *The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent*, Palgrave Macmillan, 2006. (『人はいかにして神に出会うか 宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。)

3. ジョン・ヒック『ジョン・ヒック自伝 宗教多元主義の実践と創造』トランスビュー、2006年。

4. 間瀬啓允『現代の宗教哲学』勁草書房、1993年。

5. 間瀬啓允・稲垣久和編『宗教多元主義の探究—ジョン・ヒック考—』大明堂、1995年。

6. 間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、2008年。